The Prince and the Pauper 研究
—マーク・トウェインに見る父親像—

島　田　由　香

序

1881年に出版された *The Prince and the Pauper* は，マーク・トウェインが2人の娘達を中心に妻や近所の人達へ読み聞かせた作品であり，児童文学的要素を多分に含んでいる。副題にも「あらゆる時代の若い人たちのためのお話」だとしている。トウェインは，読み手に子供たちを意識している。ジャーナリスト，ユーモリストではなく「家族」や「子供」を大切にしている一人の親としての姿勢がうかがえる。本稿では，親としてのトウェインの一面を考察していく。

The Prince and the Pauper は，同じ日に生まれた王子エドワードと貧民街に暮らす乞食トムというまったく別世界に暮らす2人の男の子が出会い，互いの衣装を取り替えることによって様々なでき事に遭遇する話である。衣装を交換した2人はあまりにも似すぎていたため，「私は，プリンス・オブ・ウェールズだ[1]」とエドワードが家臣に言っても，トムが「事実，私は王子ではありません。ただの貧しいオファール・コートに住むトム・キャンティです」と叫んでも，周囲の人に信じてもらえず，乞食の格好の王子エドワードは乞食として宮殿の外に放り出されてしまう。王子として宮殿で暮らし始めた乞食のトムは，最初は貧民街の家に帰りたがるが，そのうち王子の生活に慣れてくると王子としての環境に喜びを見出し始める。華やかな王子の環境を失いたくなくて，いったんは実母を拒否するが，傷ついた実母の姿を見ることで本来の自分を取り戻す。王子エドワードにとって，宮殿の外，さらにはロンドン・ブリッジの向こう側が別世界であり未知との遭遇を体験する土地である。それまで国王である父ヘンリー8世と共に住んでいた城がエドワードにとってのイギリスであり，ロンドンの貧民街など同じイギリスだという意識さえ無かっただろう。自分が統治する国で迷子となったエドワードは，ロンドン・ブリッジを渡りロンドンを離れ，様々な光景の目撃者となる。3週間後にロンドン・ブリッジを渡り宮殿に戻る。戴冠式に間に合い，王子しか知り得ない玉璽の在り処をトムの協力で思い出し玉璽を示す。めでたくエドワードはエドワード6世として即位し，彼の治世は慈悲深いものとなる。

エドワードとトムの冒険はわずか3週間だったが，エドワードもトムも未知の環境で精神的に成長していく。エドワードとトムが試練を乗り越えて，成長という名の結末を迎える。これは通過儀礼，イニシエーションの儀式とも言える。イニシエーションを終え即位したエドワードが得たものは，正義と慈悲である。イニシエーション前のエドワードは，王子に成り代わっているトムに対して首吊りにし，はらわたを引き出し八つ裂きにしてやると思うが，イニシエーション後のエドワードは，摂政のサマセット公がトムを丸裸にしてロンドン塔にぶち込むと言うことを制し，トムがいなければ玉璽のありかも思い出せず王冠も取り戻せなかったと述べ，「国王陛下の

被後見人」と尊称を与える。

The Prince and the Pauper は，全部で34章中，24章が王子エドワードの話となっている。このことからエドワードの経験のほうに重点が置かれていると考えられる。まったく知らない世界に投げ込まれたエドワードのほうが，トムと比べると絶体絶命のピンチありサスペンスありといった受難続きである。受難続きの中，たった一人の味方マイケル・ヘンドンが導いてくれたからこそ，エドワードは孤独，恐れに自滅することが無く，勇敢さ素直さ無垢な心を失わなかったと言っても過言ではない。

以上のように，正義と慈悲を体得するエドワードのイニシエーションの導き手となるマイケル・ヘンドンに着目しつつ論を進めたい。トウェインが，一人の父親として，自分の道徳観，教育観をヘンドンに託したと考え，いかにヘンドンに体現させたかを見ていきたい。

1．トウェインの家族への思い

1871年10月，マーク・トウェインは，ハートフォードにある高級住宅地ヌック・ファームに立派な家を借り引っ越してくる。住人の中には，有名なストウ夫人が居る。1874年には，ヌック・ファームのファーミングトン通り251番地に土地を購入しトウェインの満足できる豪邸を建てる。引越し以前の彼の主だった作品は，*The Innocents Abroad* (1869), *Roughing It* (1872) である。この家に移ってから書いた作品は，*The Adventures of Tom Sawyer* (1876), *The Prince and the Pauper*, *Adventures of Huckleberry Finn* (1884) と発表している。ヌック・ファームに移ってからのトウェインは，子供，少年を主人公にした作品を描いている。なぜトウェインの対象が少年に向かったのだろうか。また，トウェインは，本の最初に「お行儀の良い可愛いわが子のスージー・クレメンズとクララ・クレメンズにこの本を深い愛情をこめて贈ります」としている。しかし，序章で，この話は「父から息子へ」語り継がれてきたとしている。実際には娘や近所の人に読み聞かせていたので，なぜ「父から息子へ」なのか？そこにはトウェインの後悔と自責の念があった。*The Prince and the Pauper* に登場する王子のモデルは，エドワード6世（在位1547〜53）である。ヘンリー8世と第3王妃ジェーン・シモアの間に生まれた。エドワードは9歳で即位。伯父のサマセット公爵が摂政として政治の実権は握っていた。エドワードはわずか15歳で病没する。実在し，かつ短命であった王子をモデルとしたのは，エドワードを同じように短命だった自分の息子ラングドンを重ねたのではないか。トウェインは，1872年に2歳の誕生日目前の長男ラングドン・クレメンスを肺炎で亡くしている。トウェインは，ラングドンを馬車で散歩に連れ出したが，ラングドンの傍らに居たトウェインは，ラングドンにかけていた毛布が落ちたことに気付いてやれなかった。この外出でラングドンに風邪をひかせてしまい，その時の風邪が原因で死なせてしまった事を悔やんでいた[2]。*The Prince and the Pauper* においても，「かけ布団をかけてやらず，体中を恐ろしい風にさらせてしまった」頻繁にエドワードのことを「しっかり包む」「藁とぼろで包む」「健康な身体にさせる」と繰り返しエドワードへの体調管理についての描写がでてくる。*The Prince and the Pauper* を書いていた当時，本来なら9歳に成長しているはずのラングドンに，9歳で即位したエドワードを重ね作品の中でラングドンの代わりにエドワードに冒険をさせた[3]。

次に，なぜトウェインは子供を主人公にしたのかを考えてみる。当時のアメリカ社会において

子供への関心が高まっていたことにトウェインも注目したと思われる。それ以前のアメリカでは，子供は原罪で汚れ悪の化身であると考えられていた。ホーソンの『緋文字』でもヘスター・プリンの娘パールは，ヘスターの罪の象徴と見られた。しかし，19世紀に入り，人々は子供の無垢さを認め育児への関心も高まってきた。子供のイメージが，原罪を背負った子供から無垢な子供へと変わった。そして19世紀半ばから，子供は，未来への希望のシンボルとなっていった。アメリカは，南北戦争後，急速な機械化，工業化，大陸横断鉄道の完成，電話の発明といった進歩めざましい時代となっていた。トウェインもハートフォードの家に発明されたばかりの，まだ珍しい電話を引いたり，新しい技術である植字機に興味を持ったり未来への可能性に大いに魅せられていたといえる。トウェインは，希望あふれる次代を生きていく子供達への期待が大きくなった。それ故「若い人たち」にこだわり，未来を生きていく子供達に伝えたいことを示したと考えられる。

未来溢れる娘達や近所の子供達に読み聞かせをするトウェインは，家庭においての理想の父親像を持っていたと思われる。トウェイン自身は，3歳のとき，9歳の姉マーガレットを亡くし，6歳の時には，9歳の兄ベンジャミンを亡くした。トウェインの父ジョン・マーシャル・クレメンズは，ヴァージニアの旧家出身と南部紳士としてのプライドだけが高く，一家の経済状態は破綻寸前で家計の為ほとんど家に不在であった。父は，トウェインが11歳に時に肺炎で亡くなっている。トウェインは，父から愛情をかけられて手をかけられた育ちとは程遠いといえる。父親亡き後，父代わりに頼った兄オライオンも頼りなかった。父親代わりの兄に見切りを付けたトウェインは，渡り職人の印刷工になってセント・ルイス，ニューヨーク，フィラデルフィア，ワシントンを回った。トウェインは，父との関係も家族との関係も希薄だったと言えよう。トウェインが父親というものから愛情を感じたのは，実父からではなく義父からだったのかもしれない。義父のジャービス・ラングドンは，経済状態が不安定な義理の息子に，『バッファロー・エクスプレス』紙の権利を3分の1買取るように資金提供をしている。身元もはっきりしないどこの馬の骨とも分からぬトウェインの人柄だけを信じ，娘とトウェインのためにバッファローの新居も義父がプレゼントしてくれた。トウェインは，はじめて父親としての存在感や役割を義父から感じたのではないか。トウェインを助けてくれていた義父ジャービスは，トウェインとオリヴィエの結婚後4ヶ月で亡くなる。数年後には，わずか1歳7ヶ月の最愛の息子を亡くしてしまう。息子の突然の死は，トウェインにトウェインの姉マーガレット，弟ヘンリーの突然の死を思い出させる。身内の死は，トウェインに改めて家族，父親として子供達に何をしてやれるのかを考えるきっかけになったのではないか。

トウェインは，娘達との関係を大切にしたと言える。特に子供の人格形成期とされる10代を大切に考え，子供の持つ生来の無垢を汚さずに育児に関わろうとした。トウェインの理想の父親像は，家庭に居ること，家族と共にいる父親だった。父親が中心になって家族をまとめていき家庭というものを形成することがトウェインの理想だったといえる。トウェインが，執筆を終えて帰宅し子供や妻，近所の人々に読み聞かせをする。父の読み聞かせという働きかけを娘達は観察する。長女スージーは以下のように記している。

We are a very happy family. We consist of Papa, Mamma, Jean, Clara and me. It is papa

I am writing about … He does tell perfectly delightful stories. Clara and I used to sit on each arm of his chair and listen while he told us stories about the pictures on the wall (136).

娘ならではの愛情のこもった観察は，家庭における父親マーク・トウェインの姿を思い浮かばせる。その中に親子の強い絆，心のつながりができる。次女スージーも幼いころを振り返り，スージーがながい話をせがんで膝によじ登ってもトウェインはうんざりした様子ひとつ見せなかったことを記している[4]。1881年のクリスマスには娘たち，近所の子どもたちとヘンドン役のトウェインで *The Prince and the Pauper* を劇で演じている。トウェインは，父親こそ子育ての責任を負い子供に関わっていくのだと考えたといえる。

2．ヘンドンに託した姿

トウェインが *The Prince and the Pauper* を執筆中の当時，アメリカ社会そのものが，価値が多様化してきていた。それまでのジェファソン的農業から産業社会へ大きく変わろうとしている時代であった。商業利益の追求，地方から新しい生活を求め都市への人々の移動があり，人々がこう考えなければならないといったことが少なくなってきた。アメリカ人の価値観や道徳観が多様化してきて，子供達に何が間違っていて何が正しいのか教えることが難しくなってきた時代だったといえる。価値観が多様化してきた社会だからこそ，トウェインは *The Prince and the Pauper* の中でトウェインの価値観を示している。トウェインのメッセンジャーとしてマイケル・ヘンドンが挙げられる。

トウェインがマイケルに託した姿は，2つ考えられる。ひとつは，母の姿である。2つ目は父の姿。まず母の姿から見ていく。母親ヘンドンは，エドワードの衣食住に気を配る。辛抱強く忍耐し，いかなる犠牲もいとわない。ロンドン・ブリッジは，エドワードの成長の旅の始まりと終わりを示している。

Their way was unobstructed until they approached London Bridge; then they ploughed into the multitude again, Hendon keeping a fast grip upon the prince's-no, the king's- wrist … Our friends threaded their way slowly through the throngs upon the Bridge (57).

トウェインは，エドワード一人で冒険，旅には出さない。ヘンドンという母親を付けている[5]。まず母親ヘンドンは，寝床を整え，布団を掛け，エドワードの洋服を調達して，針と糸で繕って，靴も用意する。繕い物が終わったら，食べ物を準備する。母親の細やかな愛情を描く。

He bent over the boy and contemplated him with kind and pitying interest, tapping the young cheek tenderly and smoothing back the tangled curls with his great brown hand … He looked about for extra covering, but finding none, doffed his doublet and wrapped the lad in it, saying, "I am used to nipping air and scant apparel, 'tis little I shall mind the cold" then walked up and down the room to keep his blood in motion, soliloquizing, as before (60).

この様子は，わが子のことを一つ一つにまで心を配る母親ならではの行為である。母親ヘンドンは，激しい眠気に襲われても，エドワードに呼ばれると起き上がり，エドワードの服を脱がせしっかり寒くないように包んでやる。自分は戸口の隙間をふさぐように床の上に横になる。それでも「これしきのこと」不平ひとつ言わない。エドワードの食事，洋服，靴，寝るところの心配をするヘンドンは，食べ物の心配をするトムの母親，エドワードに寒くないように藁をかけるトムの姉たちと同じ母親の母性をみせる。母親ヘンドンは，ぼろ服を着ているエドワードの身長を紐ではかり，古着を手に入れてくる。買うだけでなく，一針一針繕って少しでもちゃんとしたものをエドワードに着せようする。エドワードの小さな足を温かくして，雨でぬれないようにと靴も買う。母親ヘンドンは，苦手な針仕事を辛抱強くする。母親ヘンドンは，犠牲もいとわない。エドワードが鞭に打たれそうになると以下の言葉を迷わず発する。"Let the child go," said he; "ye heartless dogs, do ye not see how young and frail he is? Let him go-I will take his lashes (153)." この行為は，どんな自己犠牲もいとわない，無償の愛情を注ぐ母親の態度である。またトウェインは，母親ヘンドンに聖母マリアと重ねている。母親ヘンドンは，エドワードが本物の王子であるという確信が無くてもエドワードに忠誠を誓い全面的にエドワードを援助する。聖母マリアは，わが子イエスを神の子イエスであることを信じた最初の人である。婚礼の場でお酒がなくなる場面で，マリアはあわてず騒がずイエスを信じていた。それゆえイエスは，水を酒に変えるという最初の奇跡を起こした。ヘンドンは，自分を国王と思い込み精神に支障をきたしているエドワードについて以下のように考える。

I will not laugh-no, God forbid, for this thing which is so substance less to me is real to him. And to me, also, in one way, it is not a falsity, for it reflects with truth the sweet and generous spirit that is in him….there'd be a merry … I shall be content (65).

マリアも母親ヘンドンも世間を気にせず子供を信じ，自分の心の満足で動く。母性に目覚めたヘンドンにとって，エドワードの世話を焼くことは生きがいになっている。

次に父親ヘンドンを分析していく。父親ヘンドンは，エドワードを「生まれたばかりの赤子」も同然だと考えている。実は，精神に支障はきたしていないが，自分で顔を洗うこともできず，水をかけてもらうのを待ちタオルを取ってもらうのを待つエドワードは，ヘンドンの援助なしでは到底生きてはいけない。いくら抜群な剣術の腕前や強い意志があっても身の回りのことは自分でしなければ生きていけない。エドワードを精神的にも物理的にも助け助言をする人物ヘンドンをエドワードのそばに置き，エドワードに様々な体験をさせている。父親の役割は，エドワードに生きていく術を教え，美徳を示し，精神的な高揚を与えている。また経済的援助もする。

The inn is paid—the breakfast that is to come, included—and there is wherewithal left to buy a couple of donkeys and meet our little costs for the two or three days (67).

Hendon should go to the inn and settle his account (134).

トウェインは，父親の最大の役割は，経済的にも子供を守ってやることだと示す。父親ヘンド

ンは，「立派な宿屋」に泊まらせエドワードを疲れさせないようにする。
また子供にとっての騎士の役割も強い父親をヘンドンに託している。

The crowd closed around, threatening the king and calling him names; a brawny blacksmith in leather apron, and sleeves rolled to his elbows, made a reach for him, saying he would trounce him well, for a lesson; but just then a long sword flashed in the air and fell with convincing force upon the man's arm, flat-side down, the fantastic owner of it remarking pleasantly at the same time—

"Loose thy hold from the boy." The blacksmith averaged the stalwart soldier with a glance, then went muttering away, rubbing his arm; the woman released the boy's wrist reluctantly; the crowd eyed the stranger unloving, but prudently closed their mouths (127).

エドワードの絶体絶命のピンチを救ってくれる強い父親ヘンドンの登場である。
また，以下の会話からも父親ヘンドンの役割の一つが見えてくる。

Hendon: Reflect, sire—your laws are the wholesome breath of your own royalty; shall their source resist them, yet require the branches to respect them?

Edward: Thou art right; say no more; thou shalt see that whatsoever the king of England require a subject to suffer under the law, he will himself suffer while he holdeth the station of a subject.

エドワードに人民の上に立つ人間がどんな態度をとるべきか諭している。ヘンドンの考えを押し付けるのではなく，エドワードが自分で考えるように導いている。またエドワードに社会性を教えていく。父親ヘンドンは，たびたびエドワードに「用心して口をきいてください」と繰り返し助言する。エドワードは父親ヘンドンの忠告によって，言葉を控えはじめ，公の場での「待つこと」「辛抱すること」を体得していく。父親ヘンドンは，エドワードを教育し，世話をして見守っていこうと決意している。父親ヘンドンの最大の役割は，エドワードの社会化，エドワードを社会的存在として育てていくことである。

ヘンドンを良い父親像とするなら，トムの父親，ヘンドンの弟ヒュー，そしてヘンリー8世が悪い父親像となる。このように悪い父親像と良い父親像を対比することで，トウェインは何を伝えたかったのか。トウェインは善と悪の父親像を描くことで，正義と慈悲という価値観を伝えた。ヘンリー8世の厳しい法律によって魔女とうわさされた母親は火あぶりとなる。知能の足りない貧しい女が，布を盗み絞首刑となり，鷹を見つけ自宅に連れ帰った少年は死刑となる。目撃者エドワードは，こうした不幸の人々に慈悲をかけその命を救いたいと思うようになる。過酷な法律の体現者ヘンリー8世は，壊血病で両足が膨れ上がり亡くなる。暴力をふるうトムの父親は行方知れずとなる。兄ヘンドンの土地と財産，婚約者までも奪ったヒューに対しては，異国の地で孤独な死が待っていた。反対に慈悲深い法律の体現者といえるヘンドンは，最終的には貴族として優遇され財産と土地，婚約者が戻る。ヘンドンの背中に鞭を加えた役人は罰せられた。トウェイ

ンは，子供達に正義や慈悲を行えば，必ず報われるという価値観を示す。

エドワードは，経験を通して社会において他者と共存する為にどうすることがいいのかを体得する。そして宮廷に戻るために，ヘンドンと共にロンドン・ブリッジを渡る。

ヘンドンには，トウェインから2つの姿が託されている。家族を陰で支え，食べること寝ることに気を配る大切さを考えさせる母親の姿である。もうひとつは，家長として家族を守り，また法律を体現し善や良心を理解させ社会性を高めていく父親の姿である。

結び

トウェインは，娘達，近所の人々に物語を語って聞かせた。トウェインが，娘達に注ぐまなざしは，ヘンドンがエドワードに注ぐまなざしと同じである。エドワードは，イギリス庶民の最下層の生活を体験し，暴力，口汚いののしりによって傷つけられるが，彼の終始一貫してある「無垢」を失わないことで最後には心身の健全さと元の立場を回復する。トウェインは，試練を乗り越えていくエドワードの中に，アメリカの未来を担っていく娘達をはじめあらゆる時代の若い人たちに身に着けてほしい価値観を見せた。読者である子供達はエドワードの精神的成長に感銘を受けたであろう。この点からもこの作品は児童文学として価値ある作品になっている。

南北戦争後のアメリカは，急速な産業化が進み大きく変わろうとしていた。大都会へ押し寄せた貧しい労働者の家族の子供達が路上に放り出され，長時間労働を強いられていた。慈悲などどこにもない現状であった。政治の世界も虚栄と腐敗にあふれ欺瞞に満ちていた[6]。民主主義のアメリカで必ずしも正義が通っていたわけではなかった。トウェインは，新しいアメリカにこそ慈悲，正義という価値観が必要だと考えたのではないか。同時に子供たちが正義や慈悲という価値観を習得する過程において大人の惜しみない愛情の必要性を示している。

注

1. 本稿では，日本語訳は拙訳で英語は次のテクストから使用し引用末にページ数を付記した。
   Mark Twain. *The Prince and the Pauper*, London: Penguin Classics, 1977.

2. 1872年3月に長女スージーが誕生したが，6月に長男ラングドンは亡くなる。トウェインは『自叙伝』のなかで，「子供の病気は自分のせい」と自分を責めている。亀井氏によると，トウェインは妻や家族へのセンチメンタルな愛情表現は「上品な伝統」の下では自然であったと述べている。しかし，トウェインはこの後も家族の不幸があると激しく自分を責める傾向があった。亀井俊介『マーク・トウェインの世界』p180参照。

3. トウェインが，*the Prince and the Pauper* において16世紀イギリスを舞台とした理由として，もうひとつ考えられる。「中世」や「王室」を持たないアメリカの子供達にとって「王子」「中世」は強い憧れや興味を抱かせるものだったと考えられる。トウェインは *The Prince and the Pauper* においての読み聞かせ又出版後の反響でアメリカ人の持つ中世や王室，騎士への憧れをさらに再認識したのではないか。この経験が19世紀のアメリカ人が6世紀のアーサー王の時代へのタイム・スリップをストーリーとした *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court* (1889) につながったと思われる。

4. Milton Meltzer. *Mark Twain Himself,* A pictorial Biography, Columbia and London, University of

Missouri Press, 2002. P136 参照。

5. エドワードとエドワードの世話を焼くヘンドンとの関係は，*The Prince and the Pauper* と同時期に執筆中であった *The Adventures of Huckleberry Finn* に見られるハックとジムの関係と同じである。旅する少年に必ず食事や身の回りのことを気にかけてあげる人物を配置することは，アーネスト・ヘミングウェイの *In Our Times* (1925) に登場する少年ニック・アダムスと常にニックに食事を提供する黒人男性との関係に踏襲されていると考えられる。

6. トウェイン，*The Prince and the Pauper* を執筆前後に起きた汚職事件を見ていくと以下の事件が上げられる。1872年クレディ・モビリエ事件（鉄道建設に関する政府高官の汚職事件)。1875年にウィスキー汚職事件，1876年3月陸軍長官ベルクナップ汚職のかどで弾劾，辞職。11月大統領選挙，ヘイズとティルデンの投票をめぐり紛糾。1887年には，連邦軍の南部引き上げ。再建時代終了。1881年ガーフィールド大統領猟官者ギトーに撃たれ死亡。このように南北戦争後のアメリカは，巨大な政治的欺瞞に覆われていた。

参考文献

Connie Ann Kirk, *Mark Twain A Biography,* London, greenwood Press, 2004.
Justin Kaplan, *Mark Twain and His World,* New York, Simon and Schuster, 1974.
Kennethes Lynn, *Mark Twain and Southwestern Humor,* Canada, Atlantic Little, Brown Books, 1959.
Larzer Ziff, *Mark Twain,* New York, Oxford, 2004.
Mark Twain, *The Prince and the Pauper* New York, Penguin Books, 1997.
Milton Meltzer, *Mark Twain Himself,* Columbia and London; University of Missouri Press, 2002.
William Dean Howells, *My Mark Twain,* Tennessee, Louisiana States University Press, 1967.
William M. Gibson, *The Art of Mark Twain,* New York, Oxford University Press, 1976.
亀井俊介　『マーク・トウェインの世界』(東京，南雲堂，1995)
亀井俊介　『アメリカ文化事典』(東京，研究社，1999)
後藤和彦　『迷走の果てのトム・ソーヤ』(東京，松柏社，2000)
ジェリー・グリスウォルド　遠藤育枝，藤岡糸子，吉田純子訳　『家なき子の物語』(東京，阿吽社，1995)
永原誠　『マーク・トウェインを読む』(京都，山口書店，1992)
日本イギリス児童文学会　『英米児童文学ガイド』(東京，研究社，2001)